2013年
（平成25年）
11月18日

神奈川新聞

人々の「明日」を植えよう

神奈川新聞環境セミナー「いのちの森づくり講演会」

神奈川新聞環境セミナー「いのちの森づくり講演会」（主催・神奈川新聞社、IGES国際生態学センター、協賛・横浜ゴム）が11月3日、横浜市保土ケ谷区の横浜ビジネスパークウエストタワーで開催された。講師はこれまで国内外1700カ所で4千万本以上の植樹を指導している宮脇昭さん（横浜国立大学名誉教授）。県内では横須賀市、秦野市などの自治体をはじめ、社会福祉法人進和学園や横浜ゴムなどの各企業の植樹に関わっている。講演は約150人を集め、会場は活気に満ちた。講演の要旨を紹介しよう。なお、宮脇さんは12月から、本紙「わが人生」に登場する。

宮脇 昭 横浜国立大学名誉教授 国際生態学センター長

みやわき・あきら 1928年岡山県生まれ。植物生態学者。広島文理科大学（現広島大学）卒業、58～60年西ドイツ国立植生図研究所研究員。70年代初めから世界各国で植樹を推進。89年、日本列島の植生を調べ上げた「日本植生誌」全10巻刊行。92年紫綬褒章、00年勲二等瑞宝章、06年ブループラネット賞。

公益財団法人地球環境戦略研究機関国際生態学センター 国・自治体や民間企業と共同で、里山などの地域生態系の調査や環境保全林の創造、海外ではマレーシアの熱帯雨林再生やアジア太平洋地域の生態系調査など、生態学の視点から独自に調査研究を行う。

講演会終了後は、参加者との質疑応答が行われた

ふるさとの木によるふるさとの森

生存の基盤である緑の衣

私たちが皆さんと共に植えなければならない木は、あなたの愛する人のいのちを守るものです。

私たちは勝手に生まれてきたわけではありません。およそ40億年前に地球に誕生した原始のいのち。その細いいのちが一度も切れずに続いたおかげで、いまここにいます。私たちはあなたの、私の、日本人の、人類の遺伝子を未来に残す一里塚として、生かされているのです。そのかけがえのない私たちの遺伝子の緑の衣は、土地本来の〝ふるさとの木によるふるさとの森〟です。人間をはじめとするすべての動物の生存の基盤になっています。

この話をすると、何をいまさら、日本は緑豊かな国ではないか、と反論をされることがあります。実際、全国土の68％は森林ですが、その大部分は土地本来の森（潜在自然植生）ではなく、さまざまな人間活動の影響によって変えられた代償植生です。

国木田独歩の「武蔵野」に出てくるクヌギ、コナラ、ヤマザクラなどの落葉広葉樹林も、土地本来のものではありません。数百年前から人間が、飼料、燃料などの資源として利用するために、管理してきた二次林なのです。

特に第2次大戦後、日本は復興にまい進し、高度経済成長を実現するために、山を削り、谷を埋め立てるなど大規模開発を行ってきました。植樹は生産材をつくるために、マツやスギやヒノキが中心でした。もちろんこれも大切です。また、横浜や東京のようにセメント砂漠になったまちを、美的・化粧的にする緑化も大事だと思います。

しかし、私たちの周りの森は、いのちを守る森とは、とういていかけ離れたものになってきたのです。

土地本来の森は0・06％

私は農家の4男で、田んぼの雑草取りに苦労している様子を見ていました。大学で雑草の生態学系研究を始めたきっかけになっています。1958年にドイツ政府に招かれて留学。そこで生涯の恩師になるラインホルト・チュクセン教授に出会います。彼から「見えているものはごく一部。見えないものを見る力を養いなさい。そのためには自分の目で見て、手で触って、舐めて、においを嗅いで調べることだ」と教えられました。

毎日、土を掘る生活をしていたある夜、夢を見ました。岡山の郷里にある無人の祠で行われる秋祭り。恐ろしいまでの黒々とした大い木の枝の情景が浮かんできたのです。私はとれこそ潜在自然植生の主木ではないかと思い立ちました。帰国してすぐに調べてみると、まさにその木がアカガシとウラジロガシで、中国地方山地の潜在自然植生の主木だったのです。

現場主義の大切さを身をもって知った私は、全国から集まってくれた学生約20人と一緒に夜行列車に揺られながら、全国各地の鎮守の森や古い屋敷林などを、10年以上かけて調査して回りました。その一人に横浜国大の鈴木邦雄現学長がいました。調査の結果、日本の土地本来の森は、関東以西の海岸から海抜800㍍付近までは、シイ、タブ、カシ類などの照葉樹林（常緑広葉樹林）、同800～1600㍍までは、ブナ、ミズナラ林などの落葉（夏緑）広樹林、1億2千万人の日本人の92・8％が定住している照葉樹林域は、わずか0・06％しか土地本来の森は残っていないことが分かったのです。

岩手県大槌町での植樹は、2017年まで続く

目を世界に向けても同じことが言えます。例えばヨーロッパ諸国は家畜を放牧したことで森が失われました。特にスペインはまったくありません。森の下草こそ、上の森を支えているのです。森の跡地は芝生公園やゴルフ場になりましたが、管理し続けないと維持できません。その上、防音、集塵、空気の浄化、水質保全機能も森の30分の1しかないのです。

環境保全、防災機能を持つ

植物は根が大事

人間のいのちの共生者である土地本来の樹種は、深根性・直根性です。そのため、多彩な環境保全、高い防災機能を持ち、生物多様性を維持しているのです。

その一例が1995年の阪神淡路大震災です。現地調査したところ、ある公園で私は、葉は焼けてはいるものの、近くのアパートの延焼を防いだ潜在自然植生のアラカシ、シイなどを確認しました。また、建物は焼失していた神社でも、そこにあったカシノキ、モチノキ、シロダモなどは一本も倒れていなかったのです。

そして2011年3月11日の東日本大震災。白砂青松とうたわれたマツ林は根が浅いために、大津波によって根ごと倒されました。防潮林としての機能を果たせなかったのです。

その一方、タブノキやシラカシ、土地本来のマサキ、ネズモチはしっかり生き残っていました。

コンクリートの防潮堤を破壊した津波ですが、本物の森ならば、森のカーテンが津波エネルギーを和らげ、引き波に対してはフェンスの役割を果たします。これこそ本物の森の力です。森の防潮堤があれば、2万人もの人のいのちが失われずに済んだかもしれないと思います。

ポット育苗を考案

木を植えても森になるまでには、100年かかるだろうと思われるかもしれません。

私が考案したやり方（宮脇方式）で植樹すれば15～25年ほどで限りなく自然に近い土地本来の多層群落の森、潜在自然植生の顕在化が可能です。

その土地本来の潜在自然植生を調査し、主木群を中心にした森を構成する30～50種を選定します。

樹種はポット育苗で根を十分に発達させてから、混植・密植（1立方㍍当たり3～5本）させます。2～3年は草取りを必要としますが、その後は管理する必要はありません。成育するにしたがって自然淘汰を繰り返しながら、樹木自身の落ち葉などで土をつくるようになります。

もう一つ重要なのはマウンド（土塁）です。植物は根が大事で、その根は酸素を必要とします。そこで穴を掘り、毒性のない建築残土やがれきを土と混ぜて埋めれば、土壌の間に空気層が生まれ、根が酸素を求めてより深く地中に入り込もうとするのです。

岩手県大槌町の植樹では、震災によるがれきを投入しました。がれきはごみではなく、貴重な地球資源です。亡くなった方、被災した方の思いを伝える「鎮魂の森」になるでしょう。

最後に伝えたいのは、木を植えるということはいのちを植えることです。「明日」を植えることです。子どもたちと一緒に取り組んでいただきたい。

植樹用のポット苗を栽培
社会福祉法人進和学園

障害者の生活支援・就労支援組織である進和学園では、宮脇名誉教授の指導により、ドングリや木の実から植樹用のポット苗を栽培するプロジェクトを進めている。

「豊かな情操を育み精神（心）の自立につながります。力を合わせて自分たちが育てた苗木が各所に根付き、将来見事な森に育つことに思いを馳せることは〝生きがい〟にもなっています」と出縄雅之理事長。

また、苗木の販売を行うことで経済的自立を目指している。今年で8年目になる同プロジェクトで苗木の累計出荷本数は12万本を超えた。

地球貢献企業を目指し、「YOKOHAMA千年の杜」を展開中

横浜ゴム代表取締役会長兼CEO
南雲 忠信

2017年に弊社は創業100年を迎えます。社会からゆるぎない信頼を得る地球貢献企業になるため07年、中期経営計画「グランドデザイン100」をスタートさせました。会社の企業価値を高める活動とともに、国内外の事業所で17年までに50万本の木を植えようという「YOKOHAMA千年の杜プロジェクト」を立ち上げ、いままで国内13カ所、海外16カ所の計29事業所で、31万5000本を植樹しました。

このプロジェクトのご指導をいただいているのが宮脇先生です。そこで宮脇方式による土づくり、苗づくりは、当社の従業員が担っています。

弊社として引き続き、同プロジェクトを国内外で進めていきますが、ここで培ったノウハウを社会貢献に活用していきたいと考えています。

皆さまのご理解、ご協力をよろしくお願い致します。

07年11月に植えた苗は、5年後の12年3月には大きく成長している（横浜ゴム平塚製造所）

緑の防潮堤づくりを支援　岩手・大槌町

横浜ゴムは、岩手県・大槌町の「鎮魂の森」構想に賛同。そのモデル植樹を全面的に支援している。

場所は町内を流れる小鎚川沿い。12年、東日本大震災の際のがれきから分別されたコンクリートを含む不燃物と化学処理が施されていない自然木を内部に埋め、長さ50㍍のマウンドを造成。同年4月の第1期植樹祭には543人が参加して、3391本の木を植えた。13年5月の第2期は、第一期に隣接する長さ50㍍のマウンドに553人が5千本を植樹した。

参加者は同プロジェクトを提唱した宮脇名誉教授を始め、大槌町の碇川豊町長、同社の南雲会長、従業員、地元町民や仮設住宅に暮らす人、ボランティアらが全国から集まって、一緒に汗を流した。

このプロジェクトは17年まで毎年実施し、全長300㍍の「平成の杜」が完成する。

企画・制作＝神奈川新聞社湘南総局